

# ヤマト王権はいかにして始まったか

Part. II

11月22日、弥生の里ホールで、青垣生涯学習センター・唐古・鍵考古学ミュージアム開館10周年を記念して「ヤマト王権はいかにして始まったか Part. II」が開催され、421人が参加しました。

今月号は、特別講演・基調報告、シンポジウムの内容を簡潔に紹介します。

## 特別講演

演題 「2・3世紀の長突円墳（前方後円墳）の胎動とヤマト」

講師 石野博信

中国の漢の時代には「陵寝制」という墓の上に建物を建て、食べ物を供えるような制度があり、そのような風習が2世紀の出雲や大和に入ってきたと考え



## 石野博信さん

兵庫県立考古博物館長。初期の纏向遺跡の調査を担当。弥生から古墳時代にかけての墳墓・住居などを全国的に研究する第一人者。

## 基調報告

演題 「唐古・鍵遺跡と弥生から古墳へ」

講師 藤田三郎

ヤマト王権の始まりを考えるうえで唐古・鍵遺跡の動向は重要で、弥生時代後期後半になると集落内部に墓が築かれたり、森林を好むカエルが生息していたり、環濠の消長とともに大きく変化します。

また、遺跡周辺には小集落が増大します。このような変化を集落の衰退とみるのか、混乱と収束が新たな時代へと変化させたかとのかが重要であると考えます。

演題 「纏向遺跡の出現と前方後円墳の成立」

講師 橋本輝彦

奈良盆地の東南部には、出現期の前方後円墳が多数

発見されています。それらは、ヤマトの弥生時代後期の墓（方形周溝墓）からは、規模やその内容から系譜がつながりません。

また、纏向遺跡内には、墳丘プランが「纏向型」と「箸墓型」タイプの2系統、そして全長30mほどの中規模の前方後円墳、方形周溝墓などがあり、遺跡内の首長系譜と階層性が今後の課題となっています。

演題 「オオヤマト古墳群の成立と展開」

講師 松本洋明

天理市南部から桜井市北部の東山麓に展開するオオヤマト古墳群では、100〜200m級の前方後円墳が多数築造されています。それらの中で、天理市中山町の中山大塚古墳は葺石・段築、長大な竪穴式石室や木棺、埴輪祭祀の採用などその後の古墳祭祀を特徴づ

けるさまざまな要素を持つて出現した画期的な古墳です。

この古墳築造後に箸墓古墳から西殿塚古墳へと展開したと考えますので、これらの古墳は一連の系譜であると思います。

演題 「土器類の移動・交流からみた大和と吉備」

講師 秋山浩三

古墳の出現期において、日常土器の交流では、吉備地域の土器が播磨や大和より河内で多く出土し、西の玄関口として河内地域が存在しています。一方、吉備で発達した葬儀用の器台は大和で多く出土しています。これらの現象を大和や河内を個別にみるのではなく、近畿全体で吉備との関係があり、そういう関係が非常に強く結びついていることで近畿地方に古墳が出現したと考えています。



**藤田三郎**

町文化財保存課長。唐古・鍵遺跡の調査を長期にわたって担当し、遺跡を総合的にまとめる。

**橋本輝彦さん**

桜井市纏向学研究センター主任研究員。纏向遺跡の調査を担当し、180次に及ぶ調査の多くに関わる。纏向遺跡を詳細に研究する。

**寺澤薫さん**

桜井市纏向学研究センター所長。唐古・鍵遺跡や纏向遺跡などの調査を担当。弥生から古墳時代の考古学資料から王権の誕生・政治史を研究する第一線の研究者。

**松本洋明さん**

天理市教育委員会事務局文化財課長。中山大塚古墳などオオヤマト古墳群の調査を担当するとともに、これら古墳群の保存に尽力する。

**秋山浩三さん**

大阪府立弥生文化博物館副館長。岡山県楯築墳丘墓や弥生環濠集落である和泉市池上曾根遺跡などの調査に関わる。弥生集落・交流などの分析を行う。

**シンポジウム**

寺澤薫さん（コーディネーター）の進行のもと、ヤマト王権の成立に関わりのある田原本町・桜井市・天理市の地域密着型シンポジウムとして、各パネラーが持論を展開しました。

古墳時代の始まりについては、概ね「庄内式」といわれる土器型式からという意見の一致のもと、各論が進行しました。

1つ目は、唐古・鍵遺跡の環濠集落が弥生時代後期から古墳時代にかけて埋没・縮小し、周辺に小集落が増加する原因と、纏向遺跡の出現とその主体は大和なのかどうか。

2つ目は、大和王権といわれる前方後円墳をシンボルとする政治体制の墓制は大和地域からつながるのかどうか、また、前方後円墳の系統と変遷（へんせん）はどうか。

3つ目は、大きな墓を造る際になぜ吉備の要素が入ってきたのか、また葬儀用の器台の使われ方・儀礼、大和王権の権力的な実態と

はどのようなものか、などについて、各パネラーの発言がありました。

最後に寺澤さんから、講師の方々に邪馬台国は大和にあったと考えていると思いますが、ヤマト王権と卑弥呼の政権の関係について一言ずつ求められました。

**秋山**：卑弥呼がいたのは唐古・鍵遺跡であると考えています。箸墓古墳のような定型化した前方後円墳の段階でのヤマト王権は、吉備などの連合の中での共立された卑弥呼の王権だと思えます。ベースは大和・河内にウエイトを置いた状態での発想をもう少し考えていきたいと思えます。

**松本**：天理市にある東大寺山古墳から「中平」の年号が入った2世紀後半の太刀（たち）が出土しています。この太刀が副葬された背景には、纏向遺跡が出現しその後オオヤマト古墳群の展開があったからだと思います。そういった地域に、纏向遺跡は中国との外交を構える力があつたと考えられるのではないかと思います。

**橋本**：纏向遺跡に大和の政権中枢が置かれることは、大和に中心になる勢力や人物、卑弥呼がいたからではないかと思えます。そういう意味で纏向遺跡は卑弥呼が女王になった場所、そして唐古・鍵遺跡が卑弥呼の出所になると思っています。ただ、大和には坪井・大福遺跡や平等坊・岩室遺跡（いわむろ）などの大きな環濠集落がありますので、そのなかでどこかで卑弥呼が生まれ纏向遺跡で女王になった場合もあると思えます。

**藤田**：皆さんの話を聞いていますと、卑弥呼が唐古・鍵遺跡にいた可能性もあり、心強く思いました。今後唐古・鍵遺跡の発掘を進めて、ヤマト王権との関係を考えていきたいと思っています。

**石野**：纏向の時代には唐古・鍵遺跡は過疎地ですが、その直前まで栄えていたのは唐古・鍵遺跡で、そのリーダーと楯築（たてつき）のリーダーが相談し、過疎地であった纏向に新しい都を造りあげたのではないかと思います。